

近世城郭跡における近現代建築家の作品について

福嶋 啓人（奈良文化財研究所）

1. はじめに

2016年に「ル・コルビュジエの建築作品」が世界遺産に登録され、日本国内ではコルビュジエの基本設計をもとに建てられた国立西洋美術館が選定された。明治時代以降に建てられた近現代建築の文化財としての価値には、その作品の意匠や技術、社会的な意義だけでなく、設計をおこなった建築家の作家性も大いに含まれている。ル・コルビュジエの作品群のように、特に設計者が判明する作品については、単体の建造物だけでなく、一建築家の作品群として価値づけがなされる場合もあろう。近現代建築の価値を鑑みる上では、建築家の作家性も非常に重要な要素であるといえ、留意する必要がある。

全国の近世城郭跡に立地する近現代施設の概要は、本報告書の内田和伸氏によって述べられている。本稿ではそこから設計者の判明した施設を対象に、明治以降の近現代に活躍した建築家の作品の一つとして、近世城郭跡に立地する近現代施設を鑑みたい。

本稿の構成は大きく二つに分けられる。まず次章において、確認できた各建築家の主要な活動時期を戦前期と戦後に区分し、建築家の経歴と主要作品、そして近世城郭跡に立地する建築作品の特徴や社会的な評価について概説していく。次に第3章では、取り上げた近現代建築家の特徴や共通点、また彼らの設計による近世城郭跡に立地する近現代施設の意匠や作品群としての評価について、さらに考察を深めてみたい。

2. 近現代の建築家による作品

本章では近世城郭跡に立地する近現代施設の設計者について、来歴や主要作品を概説し、近世城郭跡に立地する彼らの作品についてもその特徴や社会的な評価を簡潔にみていく。(1)(2)では全国的に作品を多く残す建築家について、主要な活動時期を戦前と戦後に大別した。次に(3)では近代以降に日本において活躍した外国人建築家の作品を取り上げる。(4)では地方を活動の基盤として活躍したとみられる建築家についても紹介しておきたい。

(1) 戦前に活躍する建築家の作品

1) 片山東熊(1854-1917)

片山東熊は工部大学校建築学科の第1期生で、宮廷建築や博物館など多くの建築作品を手がけた人物である。辰野金吾や後述の妻木頼黄とともに明治期の近代建築黎明期を支えた一人である。主要作品には旧東宮御所(現迎賓館、1909、国宝)や奈良国立



図1 仁風閣(内田和伸氏撮影・提供)

博物館（1894、国指定重要文化財（以下、国重文）、京都国立博物館（1895、国重文）、東京国立博物館表慶館（1908、国重文）がある。

本調査では、鳥取城二の丸跡に立地する仁風閣（1907、国重文、図1）が確認される。仁風閣は鳥取池田家の第14代当主池田仲博侯爵によって建てられたフレンチ・ルネッサンス様式の洋風建築である。現在は資料館として利用され、周囲の庭園とともに整備されている。当建物は中国地方屈指の明治建築として評価も高い。

2) 妻木頼黄（1859-1916）

妻木頼黄は工部大学校出身で、アメリカ留学後に中央官庁街建設のために設置された臨時建築局に勤務し、官庁営繕組織の長を長年務めた人物である。主要作品には旧日本勧業銀行（現千葉トヨペット本社、1899、千葉に移築、登録有形文化財（以下「登



図2 旧山口県庁舎（内田和伸氏撮影・提供）



図3 旧山口県会議事堂（内田和伸氏提供・撮影）

録」と記す)) や旧横浜正金銀行本店（現神奈川県立歴史博物館、1904、国重文）などがある。

本調査では山口城跡に立地する旧山口県庁舎および県会議事堂（現山口県政資料館、武田五一・大熊喜邦が担当、1916、国重文、図2・3）が確認される。山口県政資料館は近代的な西洋建築様式と伝統的な和風様式が融合した大正建築の特徴をもつ近代建築として高く評価されている。

3) 伊東忠太（1867-1954）

伊東忠太は建築界以外にも名の知れた人物であろう。東京帝国大学出身で日本建築史の創始者である。日本の近代建築界でも多大な影響を与えた人物の一人で、1943年には建築界で初めて文化勲章を受章した。主要作品には平安神宮（木子清敬・佐々木岩次郎と共同設計、1895、国重文）や築地本願寺（1934、国重文）など多数挙げられる。

本調査では、米沢市米沢城跡に立地する上杉神社稽照殿（1923、登録）や伊賀市上野城跡に立地する俳聖殿（1942、国重文、図4）などが確認される。なかでも甲府城跡の立地する謝恩碑（明治神宮造営局技師大江新太郎と共同設計、1920、図5）は、古代エジプトの神殿に見られるオベリスク型の碑やパイロン型の碑台が特徴的である。この謝恩碑は明治期の度重なる水害によって荒廃した県内の山林に対して、明治天皇より県内御料地が下賜されたことへの感謝と、水害の教訓を後世に伝えるために建設されたもので、今もなお、山梨県のシンボルであると



図4 俳聖殿（筆者撮影）



図5 謝恩碑（内田和伸氏撮影・提供）

いう。

4) 長野宇平治 (1867-1937)

長野宇平治は帝国大学工科大学の出身で、辰野金吾の弟子として知られる。数多くの銀行建築を手がけ、特に日本銀行の本支店作品群が著名である。主要作品は日本銀行本店本館（1896、国重文）や旧日本銀行京都支店（現・京都府京都文化博物館別館、1906、国重文）などが挙げられる。

本調査では、岡山城二の丸跡に立地する旧日本銀行岡山支店本部（現ルネスホール、1922、登録）が確認される。ルネスホールは正面中央にコリント式オーダーと三角ペディメントを設けた古典主義様式のデザインで、全体的に重厚で格調高い意匠が特徴的である。2005年より岡山の文化芸術の創造拠点として活用されている。

5) 中條精一郎 (1868-1936)

中條精一郎は東京帝国大学工学部建築学科の出身で、卒業後文部省技師を務め、明治41年（1908）に曾禰達蔵とともに曾禰中條建築事務所を開設し、多

くの作品を残した人物である。中條が主に担当したと考えられる主要作品には、文部省時代の作品である北海道大学旧札幌農学校昆虫学及養蚕学教室（1902、登録）や慶應義塾大学50周年記念図書館（1912、国重文）、遺作である岩崎家熱海別邸（1935）が挙げられる。

本調査では米沢城跡にある米沢市上杉記念館（1925、登録）が該当する。中條の作品のなかでは唯一和風建築であるが、一部に洋風意匠も盛り込まれ、貴重な事例として評価される。現在は飲食・観光施設として開放され、観光客や市民に親しまれている。

6) 矢橋賢吉 (1869-1927)

矢橋賢吉は東京帝国大学工科大学造家学科の出身で、卒業後は工手学校（現工学院大学）造家学科教授、明治31年（1898）以降は営繕官僚として多くの庁舎建築を手がけた人物である。主要作品には旧岐阜県庁舎（1922、岐阜県近代化遺産）や石川県庁舎（現石川県政記念しいのき迎賓館、1922）、旧北海道拓殖銀行小樽支店（1923、小樽市指定歴史的建造物）などが挙げられる。

本調査では江戸城跡に立地する旧枢密院庁舎（現皇宮警察本部庁舎、1921）が確認される。ネオ・ルネッサンス様式の建物で正面の古代ギリシア・ドリス式の円柱が特徴的で、重厚感を与えている。昭和22年（1947）の枢密院制度の廃止後は最高裁判所などの仮庁舎、皇宮警察本部庁舎として使用されていた。昭和59年（1984）以降は一部が倉庫として利用されるのみであったが、2013年より再び皇宮警察本部として再利用されている。

7) 土屋純一 (1875-1946)

土屋純一は東京帝国大学工科大学建築学科の出身で、大学院在籍中より当時奈良県技師であった関野貞のもとで寺社修理工事に関わり、卒業後の明治35年（1902）より正式に奈良県技師となって多くの社寺修復工事を監督した。同40年（1907）より名古屋高等工業学校の教職に就き、大正10年（1921）には建築科長、昭和8年（1933）から6年間は校長を務

めた。顧問を務めた愛知県庁舎など、設計に関与した作品は数多い。

本調査では松阪城跡に立地する旧鈴谷遺蹟保存会正門・事務所・堀（現本居宣長記念館、1909、登録）が確認される。本居宣長邸の移築工事とそれともなう整備工事として正門・事務所・堀が新築された。実施設計は当時神宮司庁営繕課事務嘱託の奥野栄蔵がおこない、土屋は指導監督を務めたとみられる。移築部分については現在の文化財建造物修理に通じる手法でおこなわれている。

8) 佐藤功一 (1878-1941)

佐藤功一は東京帝国大学工科大学建築学科の出身で、卒業後は三重県技師、宮内省内匠寮御用掛を務め、明治43年（1910）に早稲田大学に建築科を創設した人物である。多くの庁舎や講堂施設を手がけたことで知られ、主要作品には早稲田大学大隈記念講堂（1927、国重文）や日比谷公会堂・市政会館（1929）、滋賀県庁舎（1939、登録）などが挙げられる。

本調査では、前橋城本丸跡に立地する群馬県庁舎昭和庁舎（1928、登録）と二の丸跡に立地する群馬会館（1929、登録）が確認される。群馬県庁舎昭和庁舎と、道を挟んだ向かいに立つ群馬会館はともにルネッサンス様式の建築で、一階は石貼り、上層はスクラッチタイル貼りの外観意匠として、優雅で軽快な印象を与えている。両建物とも現役で使用されており、県民・市民にとって親しみのある建物といえよう。



図6 旧大阪砲兵工廠化学分析場
（内田和伸氏撮影・提供）

9) 田村鎮 (1878-1942)

田村鎮は東京帝国大学建築学科の出身で、卒業後は陸軍省に入り、技師として数多くの軍関連施設を手がけた人物である。田村が設計に大きく関わったと推定されるものには、樺太守備隊司令官宿舎（現ロシア陸軍法務局サハリン州軍管区裁判所、1908）があり、また本調査に該当する江戸城跡に立地する旧近衛師団司令部庁舎（現国立近代美術館工芸館、1910、国重文）が代表作といえる。

旧近衛師団司令部庁舎は江戸城周辺に数多くあった明治期の洋風煉瓦造建築が急減するなかで、旧態を良好に残す貴重な事例である。

10) 置塩章 (1881-1968)

置塩章は東京帝国大学工科大学建築学科の出身で、卒業後は陸軍省に勤め、大正9年（1920）に兵庫県庁営繕課に移り、昭和3年（1928）には独立して設計事務所を構えた。軍関連施設、公共施設を多く手がけ、独立後も官民にかかわらず幅広く設計活動をおこなった人物である。主要作品には旧鳥取県立図書館（現わらべ館、1930）や宮崎県庁舎（1932、登録）などがある。

本調査では、陸軍省時代に設計した大阪城跡にある旧大阪砲兵工廠化学分析場（1919、図6）や兵庫県時代の旧尼崎警察署（1926）、独立後の水戸城跡にある茨城県三の丸庁舎（1930、図7）と多数確認される。旧大阪砲兵工廠化学分析場は現在閉鎖状態ではあるが、陸軍技師時代に手がけた作品の中で唯



図7 茨城県庁三の丸庁舎（内田和伸氏撮影・提供）

一現存するもので、貴重な事例である。また旧尼崎警察署は昭和40年（1965）まで現役で使用され、内部も比較的良好に往時の状態を保つ。現在ではイベント施設として活用され、地元市民にも親しまれている。茨城県三の丸庁舎は2011年の東日本大震災によって被害を受けたが、耐震補強および復元工事がなされ、現在も現役で使用されている。

11) 木子七郎（1884-1954）

木子七郎は代々禁裏御所出入りの大工職であった木子家の出自で、東京帝国大学工科大学建築学科を卒業後、大林組に入社した。大正2年（1913）に独立して設計事務所を開設した。主要作品には、愛媛県庁舎（1929）や関西西日仏学館（原案レイモン・メストラレ、木子は設計監督、1936、登録）などがある。

本調査では、松山城跡に立地する萬翠荘（1922、国重文）が挙げられる。萬翠荘は旧松山藩主家の久松定謨伯爵の別邸として建てられたフランス・ルネッサンス風の洋館である。完成後には裕仁親王（後の昭和天皇）をはじめ皇族の滞り場所としても利用された由緒をもつ。往時の状態をそのまま残す貴重な建物であり、現在ではイベントや展示会場として幅広く活用されている。

12) 渡辺節（1884-1967）

渡辺節は東京帝国大学の出身で、古典主義を主とした様式建築を得意とし、主に関西を中心に商業ビルや事務所建築を多数手がけた人物である。主要作



図8 自泉会館（内田和伸氏撮影・提供）

品には旧大阪商船神戸支店（1922、現商船三井ビルディング）や綿業会館（1931、国重文）が挙げられる。

本調査では、岸和田市岸和田城跡に立地する岸和田市立自泉会館（1932、登録、図8）が確認される。渡辺の作品の中では比較的小規模な住宅作品であり、装飾の少ないシンプルな外観デザインであるが、玄関部分には彼が得意とした様式建築のモチーフが見受けられ、貴重な事例といえる。

13) 西村好時（1886-1961）

西村好時は東京帝国大学工科大学建築学科の出身で、卒業後は一時曾禰中條建築事務所に勤め、大正3年（1914）の東京大正博覧会の設計に関わった。この年から清水組設計部の技師となり、数多くの銀行建築を手がけた。昭和6年（1931）に独立し、西村建築事務所を開設。主要作品には旧第一銀行の熊本支店（現ピース熊本センター、1919、登録）や丸太町支店（現京都中央信用金庫丸太町支店、1927）、横浜支店（現横浜アイランドタワー、1929、横浜市認定歴史的建造物）などがある。

本調査では、名古屋城跡に立地する愛知県庁舎（1938、国重文）が挙げられる。後述の渡辺仁との共同設計で、顧問は佐野利器と土屋純一が務めた。外観意匠には名古屋城天守閣をモチーフとする造形が随所にみられ、室内においても伝統的な意匠をモダニズム的に抽象化した造形が展開し、貴重な作品である。並立する名古屋市庁舎とともに、名古屋城天守閣から強く影響を受けたデザインは、城跡という立地に加えて、名古屋城に対する郷土意識の表出といえる。

14) 渡辺仁（1887-1973）

渡辺仁は東京帝国大学工科大学建築学科の出身で、卒業後は鉄道院に勤めた。大正6年（1917）には逓信省に入省し、同9年（1920）に独立して渡辺仁建築公務所を開設した。渡辺は歴史主義様式から日本趣味の建築（帝冠様式）、初期のモダニズム建築まで多岐にわたるスタイルの作品を手掛けた人物である。主要作品にはホテルニューグランド本館

(1927) や第一生命館（松本与作とともに実施設計、1938）、旧原邦造邸（現原美術館、1938、DOCOMOMO JAPAN100選）などが挙げられる。

本調査では先述の愛知県庁舎が挙げられる。

15) 平林金吾 (1895-1981)

平林金吾は東京高等工業大学（現東京工業大学）の出身で、明治神宮造営局技手や宮内省内匠寮技手、東京市臨時建築局技師などを務めた人物である。大正から昭和初期にかけて数多くおこなわれた建築設計競技の当選者の常連でもあった。主要作品には大阪府庁舎本館（岡本馨と共同設計、登録、1926）や旧朝鮮貯蓄銀行本店（現韓国スタンダードチャータード銀行第一支店、1935）などがある。

本調査では、名古屋城跡に立地する名古屋市庁舎（1933、国重文）が挙げられる。実施設計は名古屋市土木部建築課がおこなった。中央部の高塔が特徴的で、名古屋城天守閣との調和を図り、銅板葺の宝形屋根頂部には四方睨みの鯨を載せて、千鳥破風を配する。室内意匠においても西洋の歴史様式に日本的な要素、さらには当時の流行をも巧みに織り交ぜた造形美は、非常に価値が高い。

(2) 戦後に活躍する建築家の作品

1) 阿部美樹志 (1883-1965)

阿部美樹志は明治38年（1905）に札幌農学校（現北海道大学）土木工学科を卒業したのちアメリカのイリノイ大学に留学し、帰国後は鉄道院技師として東京や大阪で高架線を手がけた。戦後は戦災復興院の総裁を務め、特に土地利用や防災不燃化の観点から戦後の鉄筋コンクリート造による高層アパートの建設、住宅供給施策の基礎を築き上げた人物として知られる。主要作品には日比谷映画劇場（1934、現存せず）や東京建物本社ビル本館（1929）があり、また旧国鉄（現JR）や関西の私鉄の高架線なども多く手がけた。

本調査では佐賀城跡に立地する佐賀県庁舎本館（1950）が確認される。阿部の建築作品のなかで現存するものの一つで、古典的で重厚な印象を与える正面入口の列柱や装飾性の少ない外観意匠が特徴的

といえる。

2) 内藤多仲 (1886-1970)

内藤多仲は東京帝国大学工学部の出身で、卒業後は早稲田大学教授を務めた。耐力壁による耐震構造理論を考案し、多くの近代建築の構造設計をおこなった。また戦後は多数の鉄骨構造による電波塔や観光塔の設計もおこなった。主要作品には名古屋テレビ塔（日建設計と共同、1954、登録）や通天閣（1956、登録）、東京タワー（日建設計と共同、1958、登録）などがある。

本調査では、甲府城跡に立地する山梨県庁舎本館（明石信道と共同設計、1963）が確認される。内藤は山梨県の出身である。規則的に並んだ開口部と茶褐色のタイル張りが特徴的で、玄関車寄せ上部は八角形に仕上げで重厚な印象を与える。耐震診断で問題が発覚したものの、2002年に免震工事をおこない、現在でも当初の形を留めたまま、現役の庁舎として使用されている。

3) 石本喜久治 (1894-1963)

石本喜久治は東京帝国大学工学部建築学科の出身で、同期卒業の堀口捨己や山田守らとともに分離派建築会を結成した人物である。卒業後は竹中工務店に勤め、昭和2年（1927）に独立して片岡安とともに片岡石本建築事務所を開設、昭和6年（1931）には単独で設計事務所を開いた。主要作品には東京朝日新聞社（1927、現存せず）や日本橋白木屋（1931、現存せず）、旧横須賀海仁会病院（現社会福祉法人聖テレジア会総合病院聖ヨゼフ病院、1939）がある。

本調査では、上田城跡に立地する旧上田市民会館（1962）が確認される。石本の晩年の作品で、数少ない石本の現存建築の一つではあるが、2014年に会館としては閉館した。それ以降も展覧会の会場として臨時利用されていたが、2017年11月をもって解体され、跡地には上田城二の丸の遺構が復元される予定である。

4) 吉田五十八 (1894-1974)

吉田五十八は東京美術学校（現東京芸術大学）卒業で、特に独自の手法によって伝統的な数寄屋建築

の近代化に大きく寄与した人物である。昭和39年（1964）には伊東忠太に継いで建築界では二人目の文化勲章を受章した。代表作には日本芸術院会館（1958）や五島美術館（1960）、大和文華館（1961、DOCOMOMO JAPAN選定）が挙げられる。

本調査では、上越市高田城跡に立地する旧小林古径邸（1934、登録）が確認される。旧小林古径邸は東京の馬込に竣工したもので、1991年に現在地に移築された。城跡との文脈はないが、吉田の設計による住宅作品では現存最古のものであり、吉田の特徴である伝統と近代化が融合した和風意匠の貴重な事例である。

5) 山田守 (1894-1966)

山田守は東京帝国大学建築学科の出身で、卒業後は通信省管轄課に入り、数多くの電信局・電話局を手がけた人物である。独立後は設計事務所を設立するとともに、東海大学工学部建設工学科にて教鞭を振るった。主要作品は永代橋（1926、国重文）や京都タワービル（1964）などが挙げられる。

本調査では、郡山城三の丸跡に立地する大和郡山市庁舎（1961、図9）や江戸城北之丸跡に立地する日本武道館（1964）が確認される。どちらも山田の晩年の作品で、大和郡山市庁舎は細いサッシとガラスのカーテンウォール、そして曲線をもった隅のガラス窓など、直線と曲線の繊細な意匠とし、表現主義的な山田の作風が見て取れる貴重な事例といえよう。



図9 大和郡山市庁舎（筆者撮影）

6) 松ノ井覚治 (1896-1982)

松ノ井覚治は早稲田大学建築学科の出身で、卒業後に米コロンビア大学に入学、学業の傍ら建築事務所に勤め、大学卒業後もアメリカで活躍した人物である。帰国後はヴォーリズ建築事務所東京主張所所長を務め、昭和25年（1950）から独立して設計事務所を開設した。主要作品には東洋英和女学院（1933）や旧亀井邸（現数江邸、1939、登録）などがある。

本調査では山形城二の丸跡に立地する山形市児童文化センター（1963）が確認される。鉄骨造平屋で細い柱と勾配の緩い屋根など洗練された松ノ井のデザインが感じられる良作である。市民にも親しまれた施設ではあったが、近年老朽化と利用者減少により、センターの廃止と解体が予定されている。

7) 今井兼次 (1895-1987)

今井兼次は早稲田大学理工学部の出身で、卒業後も同大学で教鞭をとり、旧帝国美術院（現武蔵野美術大学）や多摩美術学校（現多摩美術大学）の設立にも関わった人物である。大正15年（1926）から2か年ヨーロッパを外遊し、その際に触れたアントニオ・ガウディの作品を日本に紹介したことはよく知られる。主要作品には旧早稲田大学図書館（現早稲田大学会津八一記念博物館、1925）や礒山美術館（1957、登録）、大多喜町役場（1959、2011年耐震改修および増築）などが挙げられる。

本調査では江戸城本丸跡に立地する桃華楽堂（1966、図10）が確認される。香淳皇后の御還暦記



図10 江戸城桃華楽堂（内田和伸氏撮影・提供）

念に建てられたもので、玄関ホールの屋根は緩やかな反転曲線を持ち優雅な印象を与える。ホール部分は八角体で、花卉をモチーフとした屋根が架かる。外壁はモザイクタイルで彩られ、美術と建築が融合した華やかな建築で、今井の代表作のひとつといえる。

8) 上浪朗 (1897-1975)

上浪朗は東京大学工学部建築学科の出身で、卒業後逓信省経理局営繕課に勤め、多くの逓信省建築を手がけた人物である。昭和21年(1946)に退官後は高層建築研究所を設立し、設計活動をおこなった。主要作品には旧京都中央電話局祇園電話分局(現NTT西日本京都支店祇園別館機械棟、1927)や旧芦屋郵便局電話事務室(現芦屋モノリス、1929)、広島逓信局庁舎(1933、現存せず)などが挙げられる。

本調査では旧逓信省姫路電話局別館(現姫路モノリス、1930、姫路市の都市景観重要建造物)が確認される。逓信省独特の濃い茶褐色のスクラッチタイル張りの外観や人造石の窓枠で縁取られた窓まわりの意匠が特徴的なモダニズム建築である。

9) 城戸武男 (1899-1980)

城戸武男は名古屋高等工業学校建築科の出身で、卒業後は竹中工務店に入社、昭和8年(1933)には独立して設計事務所を開設した。戦前は表現主義やスパニッシュ風の作品を多く手がけ、戦後は機能主義建築と和風建築の秀作を残している。後述の城戸



図11 芭蕉翁記念館 (筆者撮影)

久は実弟である。主要作品には名古屋証券取引所事務館(1931)や金城学院栄光館(基本設計は佐藤鑑、1936)などが挙げられる。

本調査では、上野城跡に立地する芭蕉翁記念館(1959、図11)が確認される。コンクリート打ち放しの建物で、床面をやや上げてエントランス部分を吹き放しとすることで、横長の平屋であっても軽快な印象を与えるデザインが特徴的である。またエントランス左右の壁面はロ字型のコンクリートブロック積みとし、採光を確保するとともに、意匠的な目を引くデザインである。当建築は、伊賀市に残る戦後モダニズム建築の事例として評価できる。近年記念館としての機能移転が計画され、今後の動向が注目される。

10) 大岡実 (1900-1987)

大岡実は東京帝国大学工学部建築学科の出身で、卒業後は文部省技官や国立博物館保存修理課課長、法隆寺国宝保存工事事務所所長を務めた人物である。昭和27年(1952)からは横浜国立大学工学部の教授、同40年(1965)からは日本大学工学部教授を務めた。建築史研究者でありながら、多くの建築作品を手がけた。また木造古建築の不燃化を目指し、RC造で日本の伝統様式の再現を試みた。主要作品には浅草寺本堂(1958)や川崎大師平間寺本堂(1964)、聖光寺本堂(1970)などがある。

本調査では、松前城本丸跡に立地する松前城資料館(1960、図12)が確認される。戦災によって焼失



図12 松前城資料館 (内田和伸氏撮影・提供)



図13 旧上野市立上野西小学校体育館（筆者撮影）



図15 白鳳公園レストハウス（筆者撮影）



図14 旧上野市庁舎（筆者撮影）

した天守であったが、大岡は旧形に復するために、資料を集めて復原した建物である。またRC基礎と石垣が干渉しないように主要構造柱の位置を考慮するなど、城郭の保護にも配慮し、修理技術者でもある大岡らしい作品といえる。

11) 坂倉準三 (1901-1969)

坂倉準三は東京帝国大学出身で、ル・コルビュジェに師事し、数多くのモダニズム建築を手がけた人物である。パリ万国博覧会では日本館（1937）の設計を手がけ、海外からも高い評価を受けた。その他主要作品には神奈川県立近代美術館鎌倉館（1951、DOCOMOMO JAPAN「日本の近代建築20選」、神奈川県重文）などが挙げられる。

本調査では、三重県伊賀市上野城扇之芝跡に立地する伊賀市立上野西小学校体育館（旧上野市立上野西小学校体育館、1966、図13）ならびに伊賀市南庁

舎（1964、旧上野市庁舎、図14）、伊予丸跡に立地する白鳳公園レストハウス（1963、図15）、佐賀市佐賀城北の丸跡に立地する市村記念体育館（1963）が確認される。特に伊賀市（旧上野市）には1960年代に坂倉準三によって一連の公共建築が建てられ、なかでも市庁舎はその集大成とも位置付けられる作品として評価が高い。一方で近年、これら一連の公共建築のうち数棟が解体され、伊賀市庁舎についても取り壊しの方針であることから、保存活用に向けた運動が盛んに取り組まれている。

12) 泰井武 (1901-1997)

泰井武は名古屋高等工業学校の出身で、卒業後は東京市臨時建築局に勤務、昭和2年（1927）には西村好時が所属する第一銀行に勤め、西村の独立とともに西村設計事務所に移った。昭和19年（1944）に西村の元を離れ、昭和46年（1971）まで鹿島建設に勤めた。

泰井の作品については詳らかでないが、代表作は本調査でも確認された駿府城跡に立地する静岡県庁本館（1937、登録）が挙げられる。昭和9年（1934）の静岡県庁舎懸賞設計競技に当選して建てられたもので、実施設計は静岡県営繕課の大村巳代治らによっておこなわれた。玄関部分に変更があるものの、他は泰井の原案通りに設計された。正面中央の宝形屋根やパラペット部分を本瓦葺風にみせ、当時の流行でもあった日本趣味の意匠（帝冠様式）がよく表

れた作品である。

13) 前川國男 (1905-1986)

前川國男は東京帝国大学出身で、ル・コルビュジエや先述のアントニン・レーモンドの下でモダニズム建築を学び、戦後の日本建築界を牽引する建築家の一人で、数多くの作品を残している。主要作品は京都会館（1960、DOCOMOMO JAPAN100選）や東京文化会館（1961、DOCOMOMO JAPAN100選）などが挙げられる。

本調査では、青森県弘前市弘前城三の丸跡に立地する弘前市民会館（1964、図16）が確認される。前川の母の生家が弘前藩士であったこともあり、弘前市には前川作品が10棟残っている。城郭跡には市民会館の他に、築50年には満たないが、弘前市立博物館（1976、図17）や弘前市緑の相談所（1980）が立地する。市民会館だけでなく、前川國男の作品群と



図16 弘前市民会館（内田和伸氏撮影・提供）



図17 弘前市立博物館（内田和伸氏撮影・提供）

して弘前市の特徴にもなっている。

14) 城戸久 (1908-1979)

城戸久は名古屋高等工業学校の出身で、卒業後も同校で教鞭をとった。日本建築史研究者で、近世日本城郭建築の権威として知られ、多くの城郭の復元や再建に携わった。

設計活動を主としておこなったわけではないが、建物では岡崎城跡の復元天守が代表作といえる。当建築は実兄の城戸武男の関与も示唆される。古写真をもとに再建された天守で、都市の復興のシンボルとして戦後流行した一連の復元天守として位置づけられる。現在は歴史資料館として利用されている。

15) 藤岡通夫 (1908-1988)

藤岡通夫は東京工業大学建築学科の出身で、城郭建築や京都御所、東南アジアの王宮に関わる研究をおこなった建築史研究者である。また文化財保護委員も多数務めた。寺院建築の設計も手がけ、また城郭の外観復元も多数おこなった人物である。主要建築作品には真浄寺本堂（1951）などがあるが、専ら城郭建築の復元作品が多い。

本調査では和歌山城跡の天守閣（1958）をはじめとして、小倉城跡の天守（1959）、小田原城跡の天守（1960、図18）、熊本城跡の天守（1960）、平戸城跡の天守（1962）、岩国城跡の復興天守（1962）、中津城跡の天守（1964）、島原城跡の天守閣（1964）、唐津城跡の天守閣（1966）、会津若松城本丸跡の鶴ヶ城天守閣郷土博物館（1965）が確認される。この他



図18 小田原城跡天守（内田和伸氏撮影・提供）

に築50年に満たない城郭復元建築も多数現存する。1950年代後半からの天守復元ブームは戦後復興を象徴する都市のシンボルでもあった。これら藤岡による一連の復元建築は城郭の歴史だけでなく戦後も含めた歴史の重層が織りなす価値のある建築といえよう。

16) 内田祥哉 (1925-)

内田祥哉は東京帝国大学工学部建築学科の出身で、卒業後は逓信省、電気通信省を経て、日本電信電話公社建築部に勤めた。昭和31年(1956)から東京大学で教鞭をとり、退官後は明治大学や金沢美術工芸大学でも教授を務めた。現在でも活動を続ける現代建築家の巨匠である。主要作品には佐賀県立博物館(第一工房と共同1970、日本建築学会賞受賞)や佐賀県立九州陶磁文化館(アルセツド建築研究所と共同、1980、日本建築学会賞受賞)、大阪ガス実験集合住宅NEXT21(1993)などがある。

本調査では佐賀城跡に立地する佐賀県立図書館(東京第一工房と共同、1962)が確認される。内田の初期の作品で、コンクリート打ち放しの躯体や茶褐色タイルの壁面はまさにモダニズム建築である。二階の階高を低くし、外観の圧迫感は軽減され、スマートな意匠をみせる。手すりなど細部の意匠も特徴的で、細部の設計にまで常にこだわった内田の特性が現れる作品である。現役の図書館として市民をはじめ、多くの人々に今もなお親しまれている建築である。

(3) 外国人建築家による作品

1) H.S.パーマー (1838-1893)

H.S.パーマー(Henry Spencer Palmer)は建築家としてよりも、日本初の近代水道である横浜市水道の設計監督を務めた人物としてよく知られる。明治12年(1879)に初来日し、先の横浜市のほかに、大阪、函館、東京、神戸の水道計画を作成し、また横浜港築港工事の監督工師を務め、現代まで残る数多くの土木遺産を手がけた。

本調査では、大坂城跡本丸に立地する配水場配水池(1895)が挙げられる。明治23年(1890)年のコ

レラ流行をきっかけ、大阪市内でも標高の高い本丸跡に建設された。定期的な点検や補修、内部設備の更新がなされ、現在でも市域に供給されている。近代の土木遺産でありながらも、大阪市民の生活には欠かせない存在として非常に貴重なものである。

2) J.M.ガーディナー (1857-1925)

J.M.ガーディナー(James McDonald Gardiner)は明治13年(1880)に立教学校の校長として来日し、同25年(1892)に教職を辞して以降は、建築家として日本に多くの作品を残した人物である。主要作品には旧日本聖公会京都聖約翰教会堂(1907、1964博物館明治村に移築、国重文)や日光真光教会礼拝堂(1899、栃木県指定文化財)、旧内田家住宅(現外交官の家、1910、国重文)が挙げられる。

本調査では、山形城跡の旧三の丸に立地する山形聖ペテロ教会礼拝堂(現日本聖公会東北教区山形聖ペテロ教会、1910、登録)が挙げられる。市街中心部に位置し、急峻な屋根勾配と下見板張の外壁、尖塔アーチ型の窓が特徴的な建物である。また礼拝堂内部のトラス架構も意匠的で、明治期の教会建築遺構として貴重な事例である。

3) W.M.ヴォーリス (1880-1964)

W.M.ヴォーリス(William Merrell Vories)はアメリカ出身で当初は英語教師として来日した。明治41年(1908)には京都で事務所を設立し、日本各地で西洋建築の設計を数多く手がけた人物である。教会建築や学校建築を多く設計し、主要作品には神戸



図19 彦根市民活動センター (筆者撮影)



図20 滋賀大学陵水会館（筆者撮影）

女学院の建築群（1931、国重文）や関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス建築群（1929、経済産業省選定「近代化産業遺産群」）が挙げられる。

本調査では、彦根市彦根城跡に立地する彦根市民活動センター（1924、図19）や滋賀大学陵水会館（1938、登録、彦根市景観重要建造物、図20）が確認される。滋賀大学陵水会館はスパニッシュ・スタイルのヴォーリズの作風がうかがえる建物で、外観も当初の意匠を維持している貴重な作品として評価される。

4) マックス・ヒンデル（1887-1963）

マックス・ヒンデル（Max Hinder）は大正末期から第二次世界大戦までの間に札幌や横浜に滞在し、多くの建築を手がけたスイス人建築家である。主要作品には上智大学1号館（1931）や旧名古屋南山中学校本館（現南山学園ライネルス館、1932、登録）などがある。

本調査では、宇都宮城跡の旧外郭に立地するカトリック松が峰教会（1932、登録）が挙げられる。ロマネスク・リヴァイヴァル様式の建築であり、宇都宮で採掘される大谷石を用いた建築としては最大級のものである。八角形のトンガリ屋根の双塔はシンボリックで、宇都宮のランドマークとしても親しまれている。

5) アントニン・レーモンド（1888-1976）

アントニン・レーモンド（Antonin Raymond）はアメリカでフランク・ロイド・ライトの下で建築



図21 群馬音楽センター（内田和伸氏撮影・提供）

を学び、ライトが帝国ホテル建設の際にともに来日した。その後日本にとどまって国内に数多くのモダニズム建築を手がけ、日本におけるモダニズム建築の巨匠とうたわれる人物である。主要作品には小林聖心女子学院本館（1927、登録）やレーモンドホール（1951、登録）が挙げられる。

本調査では、高崎城跡に立地する群馬音楽センター（1961、高崎市景観重要建造物、DOCOMOMO JAPAN「日本の近代建築20選」、図21）や新潟県新発田城跡に立地する日本カトリック教団カトリック新発田教会（1965）が確認される。高崎城跡は大部分がすでに都市化され、群馬音楽センターは旧三の丸跡に立地する。レーモンドの代表作品の一つで、高崎市民からの寄付金1億円も建設費に充てられた。建築作品としても日本におけるモダニズム建築を代表するもので、建築界においても評価は高い。

（4）地方を基盤とした建築家による作品

1) 高橋兼吉（1845-1894）

高橋兼吉は現在の山形県鶴岡市に生まれ、父半右衛門の大工職を継いで修行を重ねた。慶応3年（1867）ごろに上京し、東京や横浜で洋風建築を学んだとみられ、鶴岡周辺において明治初期の擬洋風建築を多く手がけ人物である。

本調査では、鶴岡城跡に立地する、伝統技法を用いた堂宮大工としての作品である荘内神社（1877）や上京して学んだ洋風建築の意匠を用いた旧西田川郡役所（1881、1972年に現在地に移築、国重文）、

旧鶴岡警察署庁舎（1884、1957年に現在地に移築、国重文）の擬洋風建築が確認される。後者2棟は県内の明治初期の擬洋風建築群の中でも代表的な作品であり、非常に貴重な事例である。

2) 辻岡通（1886-1955）

辻岡通は福井市の出身で、名古屋高等工業学校建築科の第一期生である。設計事務所を東京に構えていたが、地元福井市内でも設計活動を継続していたとみられる。作品については詳らかではないが、主要作品には福井市役所（3代目庁舎、1933、現存せず）が挙げられる。

本調査では福井城三の丸跡に立地する旧福井信託銀行（現三井住友信託銀行福井支店、1934）が確認される。装飾を抑えた直線的なデザインが特徴的で、多くの近代建築が倒壊した昭和23年（1948）の福井地震でも被災を免れたという歴史とともに、貴重な作品として評価できる。

3) 松田昌平（1889-1976）

松田昌平は名古屋高等工業学校建築科の出身で、卒業後は南満州鉄道株式会社建築課に勤務した。昭和6年（1931）には松田建築設計事務所を構え、福岡市を中心に多くの作品を手がけた。日本建築士会連合会の副会長や福岡県建築士会会長も務め、昭和43年（1968）からは共立大学工学部の教授も務めた。松田軍平は実弟である。主要作品には北九州市旧門司三井倶楽部（1921、国重文、近代化産業遺産）や朽木ビル（1920）、旧日本足袋久留米第三工場（現アサヒコーポレーション第三工場、1930）などが挙げられる。

本調査では久留米城跡に立地する旧九州医学専門学校本館（現久留米大学本部、1929）が確認される。外観は縦長の開口部とそれに沿った3階まで通しの柱及び窓枠が、強弱をつけて垂直ラインを構成する。また玄関部分には古典風のデザインを用い、大学建築として威厳のある佇まいが感じられる。

4) 松田軍平（1894-1981）

松田軍平は兄昌平と同じく名古屋高等工業学校の出身で、卒業後は清水組（現清水建設）設計部に入

社するものの、大正10年（1921）に米コーネル大学に入学、アメリカの設計事務所で修行を積んだ。トロブリッジ・リビングストーン事務所勤務時に三井本館の設計及び現場管理に携わった。昭和6年（1931）に設計事務所を開設し、多くの作品を手がけた。主要作品には旧三井物産門司支店（現関門海らいぶ館、1937）や奉天三井ビル（1937）、旧田島繁二郎（現南アフリカ共和国大使公邸、1936）などが挙げられる。

本調査では久留米城跡に立地する旧石橋徳次郎邸（現石橋迎賓館、1933）が確認される。スパニッシュ風の住宅建築で、庭に面したコリント式円柱のアーケードや大きなアーチ状の開口部と大小の窓がバランスよく配置された外観意匠は松田軍平のデザインセンスの良さを感じさせる。普段は非公開であるが、現在でも迎賓施設やイベント会場として利用され、多くの人々に親しまれている。

5) 岩下松雄（1898-1993）

岩下松雄は鹿児島県立加治木工業学校の出身で、卒業後は満州で鉄道関係施設の設計に携わり、のちに母校で教鞭をとり、大正8年（1919）には文部大臣官房建築課に勤務、大正14年（1925）からは鹿児島県建築課技師として圏内に多くの作品を残した人物である。戦後は建築行政に尽力し、また2代目鹿児島県建築士会会長を務めた。主要作品には旧鹿児島地方气象台（1933、1990年代に取壊、現在は外観意匠を踏襲した税務署が建つ）や旧鹿児島県立第一高等女学校校舎（現鹿児島県立鹿児島中央高等学校本館および講堂、1935）が挙げられる。

本調査では、鹿児島城二の丸跡に立地する旧鹿児島県立図書館（現鹿児島県立博物館、1927、登録）が確認される。RC造の特性を活かし、隅部の塔屋や階段室に曲面を用いた堂々たる建築である。九州初のRC造による大規模な図書館建築であるといい、また戦災を免れた県内数少ない近代建築の一つで価値の高い作品である。

3. 建築家からみた城郭跡の作品

以上のように、近世城跡に立地する近現代施設について、その設計者をみてきた。本章では、そこからうかがうことができる若干の考察を記しておきたい。

(1) 著名な建築家の作品

本調査では、明治期から現代まで全国に多くの作品を残した著名な建築家が近世城郭跡にも多数の作品を手がけていることが確認できた。

戦前の建築作品については、日本の建築史上においても重要な現存作品として文化財指定を受けているものも多い。また戦後については、国の文化財指定を受けていないものの、登録有形文化財として登録されているものや地方公共団体が指定する景観形成建造物などに指定され、その城跡や都市の中で重要な歴史的建造物として認識されているものも多数確認できた。

また外国人建築家の設計による作品も見逃すことはできない。日本近代史においても彼らの功績は重要であり、建築史上においても西洋の様式や技術、モダニズム建築の意匠および構造などを日本に伝え、彼らの残した作品は、多くの日本人建築家に今もなお影響を与え続けている。

(2) 地方で活躍した建築家たちの作品

著名な建築家だけでなく、地方で活躍した建築家たちも多く、多くの建築作品を近世城郭跡に残している。本稿では5人の建築家を紹介することに留まったが、そのほかにも地元大工による作品は多数の近世城郭跡に立地している。彼らの作品は地元の伝統的な構法を継承した作品や最先端の建築様式や意匠を取り入れた作品など、全国的に活躍した建築家とは異なる地方色に溢れた建築を生み出している。建築史上においても、また郷土の歴史上においても重要な近現代建築といえるだろう。

(3) 多様な建築意匠

近世城郭跡に立地する近現代施設はその時代の先駆的な技術やデザインを用いて、多様な建物が建て

られていることが指摘できる。明治期に建てられたものでは洋風意匠の木造建築、煉瓦造による近代建築があり、昭和初期の庁舎建築では当時流行していた日本趣味の建築様式（帝冠様式）、戦後はRC造によるモダニズム建築などである。

このように各時代において、建築構造や意匠が多岐にわたる近現代建築が城跡に立地することは、城跡そのものが都市において重要な場所であることを意味し、そこに建つ建物もまたその都市の顔として注目されていたことを裏付ける。つまり城跡の歴史性や場所性などの表出としてこれらの近現代建築を評価することができよう。

(4) 群としての建築家による作品

本調査では、建築家による作品群の一つとして位置付けられる近現代施設も複数確認できた。上野城跡における坂倉準三設計の建築群や弘前城跡に立地する弘前市民会館をはじめとした弘前市内の前川國男による作品群、復興および復元天守を数多く手がけた藤岡通夫の作品群である。

坂倉の作品群は解体されたものも数棟あるが、単体の建造物としての評価だけでなく、群として高く評価され、現存建築についても保存要望が多くある。前川の作品群は弘前市内の代表的なモダニズム建築として認知され、市内観光の一つの事例ともなっている。

藤岡による天守建築は、戦後復興のシンボルとして歴史性を有し、現在では城跡が位置する都市のシンボルとして市民に親しまれているものが多い。藤岡の天守建築群については城跡の整備や復元の視点から研究されることはあっても、建築史や文化財の視点からはこれまであまり注目されてこなかった。築50年に満たない作品も未だ多いが、文化財の対象となりつつあり、藤岡の作品群として、今後注目される可能性は大いにあるだろう。

(5) 名古屋高等工業学校の卒業生の作品

本稿で取り上げた建築家の中では、東京帝国大学（現東京大学）出身の建築家が圧倒的に多い。その他には、早稲田大学や東京高等工業大学（現東京工

業大学)などの出身者も見られたが、東京帝国大学に次いで多く確認できたのが、名古屋高等工業学校(現名古屋工業大学)の出身者であった。

辻岡通(第1期生、1908年卒業)をはじめとして、松田昌平(1911年卒業)、松田軍平(1914年卒業)、城戸武男(1920年卒業)、泰井武(1924年卒業)、城戸久(1929年卒業)が卒業生として挙げられる。また土屋純一は教授として、武田五一は校長として名古屋高等工業学校に勤務していた。

本稿では同校の出身者である共通性のみを述べるに留まるが、近世城郭跡の作品と彼らの関係性は興味深い。

4. おわりに

本調査で取り上げた近現代建築家による近世城郭跡に立地する近現代施設は、各時代の先駆的な様式や意匠、技術をもって建てられ、今もなおその魅力を保っている。建築当初の用途や機能が変化するものもあるが、現役で利用・活用がなされているものも多く見受けられた。

明治の廃城後も、城郭跡は都市の中心的存在や象徴として、土地の履歴を受け継いでいる。そして、その上に立地する近現代建築もまたその履歴を受け継いだ重要な建物であるといえる。

最後に今後の展望について述べておく。本調査では近世城郭跡に立地する近現代施設について、特に設計者の判明する建築作品について、その建築家の経歴や主要作品なども含めて、考察をおこなってきた。しかしながら、著名な建築家や既往研究で詳細が明らかな41名の建築家の作品について述べるに留まった。現存する近現代施設について、より詳細な個別調査をおこなう必要がある。特に地元で活躍したとみられる建築家や大工については、さらなる調査研究が必要である。また名古屋高等工業学校の出身者のように、建築家の出身校と城跡に建つ近現代施設の関連性も興味深い事例の一つである。これらについては、本稿では示唆するに留め、別稿に譲ることとしたい。

【謝辞】

本調査にあたり、各建物および設計者の建築家について、自治体文化財課や各都道府県の建築士会には聞き取り調査でお世話になった。また内田和伸氏には多数の写真を提供いただいた。ここに感謝の意を表します。

【参考文献】

- 1) 今井兼次 1941年「故佐藤功一博士の作品」『建築雑誌』第680号 pp.859-861
- 2) 菊池重郎 1964年「明治13年来日米人建築家J.M.ガーディナーの人と作品」『日本建築学会論文報告集』第103号 日本建築学会 p.474
- 3) 谷川正己 1964年「大熊喜邦の建築観について」『日本建築学会九州支部研究報告』昭和39年度第1号 日本建築学会九州支部 pp.5-8
- 4) 内藤多伸 1965年「阿部美樹志氏を偲びて」『建築雑誌』第954号 日本建築学会 p.7
- 5) 高島猛 1977年「福井県における戦前洋風建築物について(その2. 辻岡通氏設計の2作品)」『日本建築学会大会(九州)学術講演梗概集 計画系52』日本建築学会 pp.1959-1960
- 6) 清水邦保・鳥海良晴・越野武・角幸博 1979年「山形県鶴岡大工高橋兼吉(1845~94)の経歴と作品について」『日本建築学会北海道支部研究報告集』第50号 日本建築学会北海道支部 pp.371-374
- 7) 土田充義・堺雅彦 1982年「地方の建築家松田昌平氏について」『日本建築学会研究報告 九州支部2計画系』第6号 日本建築学会九州支部 pp.489-492
- 8) 平井聖 1989年「藤岡通夫先生の思い出」『建築史学』第13号 建築史学会 pp.132-143
- 9) 土田充義・揚村固 1991「地方の建築家岩下松雄」『日本建築学会研究報告 九州支部3計画系』第32号 日本建築学会九州支部 pp.381-384
- 10) 角幸博 1994年「建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について」『日本建築学会計画系論文集』第465号 日本建築学会 pp.175-181
- 11) 川口洋光・越野武・角幸博・池上重康 2001年「建築家中條精一郎の設計活動」『日本建築学会北海道支部研究報告集』第74号 日本建築学会北海道支部 pp.313-316
- 12) 角幸博・井潤裕・石本正明 2001年「旧樺太守備隊司令官宿舍(1908)の現況と設計者について」『日本建築学会技術報告集』第14号 日本建築学会 pp.331-334
- 13) 李明・石丸紀興 2006年「建築家上浪朗の通信局舎建築作品に関する考察—広島郵便局電話分室と広島通信局庁舎建築を中心として—」『日本建築学会

- 計画系論文集』第610号 日本建築学会 pp.221-227
- 14) 名古屋工業大学 2006年『名古屋工業大学建築学科百年史』名古屋工業大学建築学科創立百周年記念会
 - 15) 石田潤一郎・中川理 2008年『近代建築史』昭和堂
 - 16) 岡崎勝宏 2009「旧尼崎警察署建物設計者・置塩章について」『地域史研究 尼崎市立地域研究資料館紀要』第39巻第1号 尼崎市立地域研究資料館 pp.41-49
 - 17) 山室裕 2009年「置塩章研究序説その1 - 大正9年官庁官舎時代から昭和12年三田学園記念図書館までの作品系譜 -」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』第49号 日本建築学会近畿支部 pp.737-740
 - 18) 清水隆宏・金田美世・河田克博 2010年「旧岐阜県庁舎の研究 その1 - 建築的特徴について -」『日本建築学会大会（北陸）学術講演梗概集 F-2, 建築歴史・意匠』日本建築学会 pp.521-522
 - 19) 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所編 2010年『萬翠荘調査報告書』愛媛県教育委員会
 - 20) 足立裕司 2011年「旧逓信省電話局庁舎に関する一考察 - 上浪朗の作品を中心として -」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』第51号 日本建築学会近畿支部 pp.885-888
 - 21) 藤岡洋保・青砥真裕 2011年「平林金吾の建築設計競技資料」『日本建築学会大会（関東）学術梗概集 F-2, 建築歴史・意匠』日本建築学会 pp.329-330
 - 22) 青柳憲昌 2013年「大岡實の「復元」建築」『日本建築学会計画系論文集』第692号 日本建築学会 pp.2199-2205
 - 23) 矢島平一・菅原洋一 2014年「本居宣長旧宅の移築工事にみる保存理念 本居宣長旧宅保存事業にみる保存理念と手法に関する研究（その1）」『日本建築学会計画系論文集』第700号 日本建築学会 pp.1407-1414
 - 24) 石田潤一郎監修 2014年『関西のモダニズム建築 1920年代～60年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』淡交社
 - 25) 石田潤一郎 2014年「名古屋市両者・愛知県庁舎の歴史的位罫」『月刊文化財』第615号 文化庁文化財部 pp.4-8
 - 26) 三宅拓也 2014年「松ノ井覚治のニューヨーク留学中の課題作品について」『日本建築学会大会（近畿）学術講演会』日本建築学会 pp.639-640